尿路結石の描出について

超音波検査と他の画像検査との比較

○丹羽　景子，武田　千恵美，日比野　みゆき，田中　昌美，鮎川　宏之
（医仁会武田総合病院）

（はじめに）尿路結石の診断や体外衝撃波結石破砕術後の治療効果判定に用いられる検査としてX線単純撮影（以下KUB）と超音波画像検査（以下エコー）が行われる。しかし各検査の結果が一致しない症例がある。そこで今回我々は上部尿路結石に対し、KUBとエコーのどちらがより有用であるかを検討するため、いくつかの要因を含め、それぞれの感度を比較した。

（対象）期間　2001年3月から2004年7月
CTにより上部尿路結石を確認されたもの

（方法）CT所見をもって結石の確定診断とし、各検査の感度をいくつかの要因別に比較した。

（結果）上部尿路結石症137結石
＊男女比　110：27　＊平均年齢　54.0±13歳
＊各検査の感度　KUB　54.7%　エコー　65.7%
＊部位別の感度　KUB　腎　54.8%　上部尿管　64.9%　中部尿管　0　下部尿管　47.8%
エコー　腎　83.6%　上部尿管　56.8%　中部尿管　0　下部尿管　34.8%

（考察）腎結石はどの部位でもエコーのほうが高感度であった。中部尿管で結石が指摘されなかったのはKUBでは腸管内ガス、仙腸関節と重なる等の要因が考えられ、またエコーでは腸管内ガスの影響や、背部からのスキャンでは骨盤が妨げとなったと思われる。

（結語）エコーは腎結石、水尿管のある上部尿管結石、3mm以上の大きさのとき感度が高かった。また仮に結石が描出されなくても水腎症の有無や尿管の拡張が観察でき、腎機能、大きさ、形態異常等が無侵襲で簡便に施行できる点で有用であると考える。

（医仁会武田総合病院検査科　075-572-6331）